

期間：平成27年11月5日(木)～11月30日(月)

場所：愛知県立大学

長久手キャンパス図書館1階ロビー

主催：長久手キャンパス図書館、稀書の会

協力：豊田市郷土資料館、足助資料館

## <企画展示>

# 「愛知県史を彩る俳人たち ～芭蕉から卓池・秋挙・塞馬へ～」

## 【芭蕉と愛知】

松尾芭蕉(正保元(1644)年～元禄7(1694)年)と、愛知の地とのつながりは、非常に深いものといえます。芭蕉は伊賀の生まれですが、30歳を過ぎた延宝3(1675)年頃より俳諧師として江戸俳壇で活躍し、延宝8(1680)年、37歳にして深川の芭蕉庵に入ります。安定した俳諧師生活を捨て、風狂の旅のうちに句をみがき、文学性を追いもとめる生活に身を投じていったのです。

そんな芭蕉の風狂の旅は、訪れる地方ごとに彼を迎える熱心な門人たちに支えられていましたが、彼が何度も往来した尾張・三河の地には、とりわけ熱意あふれる門人がいました。例えば、熱田の桐葉・鳴海の<sup>しもさとちそく</sup>下里知足といった門人たちです。

芭蕉は、貞享元(1684)年の『のざらし紀行』の旅では、10月から12月にかけて名古屋・熱田に滞在し、野水、杜国、荷兮、重五ら門人と芭蕉七部集の第一である『冬の日』の五歌仙をなしています。蕉風の開眼となったといわれる記念すべき歌仙は、名古屋の地でなされたのでした。

さらに、貞享4(1687)年初冬に江戸を出発した『笈の小文』の旅では、芭蕉は三度にわたり鳴海の知足邸に滞在し、また愛弟子杜国に会うために伊良湖に赴いています。

星崎の闇を見よとや啼く千鳥

芭蕉

鷹一つみつけてうれし伊良湖崎

芭蕉

芭蕉の文学が花開く時期、貞享年間から親しく芭蕉に接した知足は、元禄7(1694)年の芭蕉逝去後、芭蕉を追慕して『千鳥掛』と題する句集を編纂し、刊行しようとしています。芭蕉の江戸の門弟をはじめ、諸国の門人の作を網羅しようとした意欲的な撰集でしたが、彼の遺志は子の蝶羽が継ぐこととなります。

また、本学図書館は、尾張・三河のみならず、美濃、伊勢などの近隣の芭蕉門人たちの編著書も多く所蔵しています。これら蔵書は、研究はもとより、郷土の文化の理解にも利用されています。例えば、大垣は奥の細道の旅の終点として知られ、奥の細道結びの地記念館がありますが、本年度の記念館企画展(平成27年10月3日～11月15日)に、本学から『後の旅集』(如行編)、『桜山伏』(歌十編)を貸し出し展示しました。こうした貴重書は、愛知県立大学貴重書コレクションとして、Web上で公開していますから、東海地域の文芸の豊かな実りを、ぜひ本学図書館のデジタル貴重書コレクションでごらんください。

## 【愛知の俳人たち】

<sup>よこいやゆう</sup>**横井也有**(元禄15(1702)年～天明3(1783)年)は、尾張藩士の家柄に生まれ、15歳から俳諧を自学しました。藩士在任中から洒脱な俳文の才能をみせ、隠居してからはさらに漢詩・狂歌・談義物なども愛好し、俳文集『鶉衣』以外にも、発句集である『<sup>らんせつしゅう</sup>蘿葉集』など、多くの著作を著しました。藩士による俳壇グループの中心人物であったようです。

也有は『<sup>らんせつしゅう</sup>蘿葉集』の後序をまかせるなど、やはり藩士出身で<sup>きょうたい</sup>**暁台**(享保7(1732)年～寛政4(1792)年)とよい関係にありました。その暁台の後に、名古屋の俳壇で活躍したのが、<sup>いとうえしろう</sup>**井上士朗**(寛保2(1742)年～文化9(1812)年)です。平明な作風は広く門人の支持を得て、「尾張名古屋は士朗(城)でもつ」と言われるほどでした。士朗には『<sup>つばきしゅう</sup>鶴芝集』、『<sup>しんじゆんくしゅう</sup>枇杷園句集』など枇杷園関係の俳書が多くあり、弟子たちの広がりも、士朗追善の句集『<sup>さみだれ</sup>さみだれ』にも見てとることができます。

なお、東山植物園には、也有の文学にゆかりの植物を植え、その植物を詠

んだ彼の句を添えた庭(也有園)があります。秋の一日、散策してみてもよいでしょう。

## 【卓池と秋拳】

井上士朗の弟子の中でも、三河を代表する高弟二人が、鶴田卓池(明和5(1768)年～弘化3(1846)年)と中島秋拳(安永2(1773)年～文政9(1826)年)です。卓池は岡崎の、秋拳は刈谷の出身でした。卓池は士朗の『鶴芝集』の旅に随従し、士朗七回忌追善の『たかむしろ』を刊行して、枇杷園の系譜を継ぎ、秋拳と『弥生日記』を著しています。秋拳も『枇杷園随筆』を編纂し、また卓池と共に『枇杷園句集後編』も編纂しています。両者は積極的に活動し、特に卓池は、広く西三河から知多地方にかけて門人を掘り起こしました。寺部の青可、岡崎の流芝、足助の塞馬、吉田の蓬宇など、枚挙にいとまがありません。

卓池の晩年は天保期にあたりますが、このころの愛知の俳人たちは、芭蕉回帰を目指し、『炭俵』の句風を真似て、軽みの境地を求めました。卓池と秋拳も『弥生日記』の中で、『炭俵』の境地に至らんと歌仙をまいています。

また、卓池は俳画をよくし、多くの作品が残っています。人物図・四君子図・富士山図・山水図など、淡彩のやわらかな色調で、刷毛による墨彩のぼかしを駆使した彼の作品は、岡崎市立図書館の鶴田卓池文庫のデジタルアーカイブから手軽に見ることができます。江戸末期の地元の俳人の作品は、いまだ愛知県内各地に多く残り、自治体の美術館、博物館、郷土資料館の手で収集されているのです。

なお、卓池と秋拳が三河の花園山につどい、春を過ごした際の『弥生日記』は、日本文化研究の院生と教員とからなる愛知県立大学稀書の会で現在読みすすめており、成果は訳注として『文字文化財研究所紀要』に掲載しています。

## 【卓池・秋拳の弟子たちの活動～板倉塞馬～】

卓池と秋拳の大勢の弟子たちのうちでも、注目すべき存在として、足助に

住んだ<sup>いたくらさいば</sup>板倉塞馬(天明8(1788)年～慶応3(1867)年)がいます。塞馬は秋挙に学び、秋挙亡き後は卓池に師事しました。文久2(1862)年には、塞馬は秋挙・卓池の追善句集『はなておけ』を刊行し、冒頭で『弥生日記』で詠まれた故師たちの句に、自らの句を続けています。

雨に明てそよりともせず山ざくら 卓池  
巢を守り居る雉子の眼たたき 秋挙  
春の水ながれてのこる影もなし 塞馬



彼が足助・豊田の人々の句の評者として足助の俳壇を育てたことは、今回の展示資料である足助八幡宮への奉納額からも知られます。また、この時期には、芭蕉の句を刻んだ芭蕉塚の建立が流行しましたが、塞馬も芭蕉句碑(「馬をさへながむる雪のあした哉」)を足助の地に建立しています。

塞馬建立の句碑

今回の展示にかかる主要参考文献を以下しぼってあげておきます。

森川昭『下里知足の文事の研究』(第一部日記編、第二部論文編、第三部年表編)(2014、2015・和泉書院)

野田千平『稿本系うづら衣 本文と研究』(昭和55・笠間書院)

同 『近世東海俳壇の研究』(平成3・新典社)

大磯義雄『青々卓池と三河俳壇』(1989・名著出版)

谷沢靖・永田友市『西三河の俳人 中島秋挙』(1982・西村書房)

深津三郎『板倉塞馬全集』(正、続)(平成15、24・犬塚謄写堂)

(日本文化学部国語国文学科 伊藤伸江)

## <展示資料一覧>

### (1) 『<sup>おい</sup>笈の<sup>こぶみ</sup>小文』

芭蕉著、乙州編

宝永6(1709)年 江戸時代

<sup>ばしろう</sup>芭蕉が貞享4-5(1687-1688)年、江戸を出立し、三河・尾張・伊勢・伊賀・大和・紀伊を経て、須磨・明石を遊覧した際の紀行。芭蕉は鳴海の知足、保美(三河国)の杜国らと旧交をあたため、郷里伊賀にたちよっている。

### (2) 『冬の日』

<sup>かけい</sup>荷兮編

貞享元(1684)年 江戸時代

俳諧撰集『俳諧七部集』の第1。『野ざらし紀行』の旅の途中、名古屋に立ち寄った芭蕉が、<sup>やすい</sup>野水、<sup>じゅうご</sup>荷兮、<sup>とこく</sup>重五、<sup>しょうへい</sup>杜国、<sup>うりゅう</sup>正平、羽笠と興行した歌仙5巻、および追加の表6句よりなる。書名は、各連句の発句がいずれも冬の季であるところより由来。漢詩文調から脱して新しい俳諧の世界を開拓したもので、そこに蕉風の第一歩が確立されたといわれている。

### (3) 『<sup>ちどりがけ</sup>俳諧千鳥掛』

上巻(下巻欠) 知足稿、蝶羽補正

正徳6(1716)年 江戸時代

芭蕉や蕉門、各地有力俳家の連句・発句集。鳴海在住の俳人、<sup>ちそく</sup>知足が、芭蕉を偲び計画し、遺志を継いだ息子の<sup>ちょうう</sup>蝶羽が<sup>そどう</sup>素堂の助力を得て刊行。書名は鳴海の知足邸に宿った際の芭蕉の言葉「此所は名護やあつたに近く桑名大垣へもまた遠からず。千鳥がけに行通ひて残生を送らん。」による。上巻(健)には、芭蕉・知足と親交のあった人々の作を中心に、連句と冬・春の部の発句をおさめる。

(4) 『<sup>うずらころも</sup>鶉衣』

横井也有

宝暦13(1763)年 楓京本

『鶉衣』は、前編、後編、続編、拾遺の4編12冊(各編3冊)から成る、也有生涯の俳文をほぼ網羅している俳文集。也有没後、大田南畝(蜀山人)がその文章のおもしろさに感動し、也有の俳友堀田六林から稿本『鶉衣』を得て出版、それを機縁に以後続刊された。日用の俗を題材にしなごら、風雅の意識により虚構の世界を再構成するという手法によってつづられるその文章は、機知と技巧を基調とする軽妙自在な味を持つ。もつとも、その風雅は芭蕉の風雅とは趣を異にし、洒脱であか抜けした滑稽味という点に主眼がある。

(5) 『<sup>らようしゅう</sup>蘿葉集』

下卷(上・中卷欠) 横井也有著、達下編

明和3年(1766)自序 江戸時代

横井也有の発句集。春・夏・秋・冬・前書賛物・賛物の部立に、付録として延享2(1745)年の「岐岨路紀行」を収める。三冊本だが、本学図書館は下巻のみを所蔵。題名は也有の漢詩文号「<sup>らいん</sup>蘿隠」による。也有は博識多才で、漢詩・和歌・俳諧・狂歌などに興じた。

(6) 『<sup>つるしばしゅう</sup>鶴芝集』

道彦・李台・柳荘・仙市・阿彦・若人・蕉雨編

享和1年(1801) 江戸時代

士朗が松兄・卓池をともない江戸へおもむいた際の紀行『鶴芝』の再刻。<sup>すずきみちひこ</sup>鈴木道彦をはじめ道々の俳家が執筆・発行している。1編は江戸、2編は善光寺、3編は松本、4編は諏訪、5編は飯田である。

(7) 『<sup>びわえんくしゅう</sup>枇杷園句集』

士朗著 椿堂・宇洋・卓池・蕉雨・松兄編

文化1(1804)年 江戸時代

ちんどう 椿堂・たくち 宇洋・しょうう 卓池・しょうけい 蕉雨・松 兄がそれぞれ分担して編集した士朗の  
発句集。

いのうえしろう 井上士朗 (1742-1812) は名古屋の産科医。国学を本居宣長、俳諧  
かとうきょうたい を加藤暁台にまなび、ほかにも漢学、絵画、平曲をよくした。  
すずきみちひこ 鈴木道彦、えもりげつきよ 江森月居とならんで寛政の三大家と呼ばれた。

## (8) 『五仲庵有節書状』

『枇杷園句集』挟み込みのもの。(→翻刻は、10頁参照)

## (9) 『さみたれ』

月底編

文政7(1824)年刊 江戸時代

いのうえしろう 井上士朗の十三回忌にあたっての追善の連句・発句集。士朗の句を  
立句とする脇起こし歌仙と、犬山、知多、津島、清洲、蟹江など多  
く名古屋近辺からの門人の発句をおさめる。たくち 卓池、しゅうきよ 秋 挙、流芝、冨  
彦らも句をよせている。

## (10) 『弥生日記』

鶴田卓池・中島秋挙編

文政7(1824)年 江戸時代

たくち 卓池五十七歳、しゅうきよ 秋 挙五十二歳の春、三河の名所を連れ立ってめぐっ  
た後、花園山麓に寓居し、弥生の一月あまりを花をめでながら俳諧  
ざんまいにすごした折の日記である。風雅な俳諧生活の記念に同年  
五月、名古屋の書肆本屋久兵衛から刊行した。

花園山では、蕉風を慕って、芭蕉・きかく 其角らの初懐昏「鶴の歩み」にな  
らい、まず両吟五十韻を張行した。その後は、多くの門人の来訪を  
受け吟遊。亡き師いのうえしろう 井上士朗をしのび、芭蕉七部集の一である『炭俵』  
を読み、さらに滞在の終わり頃には、それを範として歌仙をまいて  
いる。

(11) 『<sup>ななしぐさ</sup>名なし草』

松兄編、卓池校

文化6 (1809) 年 江戸時代

<sup>しょうけい</sup>松兄の遺編を、息子の竹丸の依頼で<sup>たくち</sup>卓池が刊行したもの。松兄(1767-1807)は、名古屋正覚寺の住職。俳諧を<sup>きょうたい</sup>暁台と<sup>しろ</sup>士朗に学んだ。

(12) 『<sup>いぜんぼうくしゅう</sup>惟然坊句集』

秋挙編

文化9 (1812) 年 江戸時代

<sup>いぜん</sup>惟然の旧居弁慶庵を訪ねた<sup>しゅうきよ</sup>秋挙が、巴圭の勧めにより、惟然の句文や書簡、逸事などをまとめたもの。

広瀬惟然 (?-1711) は江戸前期の俳人。美濃国関の人。芭蕉の門人で、芭蕉最後の旅に支考らとともに随行した。芭蕉没後は諸国を行脚し、その後故郷に庵を結んで隠棲した。

(13) 『<sup>たかむしろ</sup>たかむしろ』

卓池編

文政1 (1818) 年 江戸時代

<sup>いのうえしろ</sup>井上士朗の七回忌に出された追善集。<sup>たくち</sup>卓池、<sup>しゅうきよ</sup>秋挙門下の三河俳人の句が主になっている。

(14) 『卓池俳画「不二の図」』

軸装

豊田市郷土資料館蔵



<sup>たくち</sup>卓池は門人石川貫河から画を学び、南画風のやわらかな色調の水墨画を描いた。五仲庵有節 (→展示資料8) に画の心を問われ、「紙上みな画にして、素なる所甚易からず、たとへば俳諧の



余韻のごとし」と答えたという（『夕沢集』<sup>ゆうさわしゅう</sup>）。

本掛軸は、『青々処句集』<sup>せいせいしよくしゅう</sup>に入る「風月や不二はやまとの寂しをり」の句と、富士山の姿を描いている。卓池も富士登山の経験があり、薩埵峠からの富士を多く描いた。句は、蕉風俳諧の美的理念である「さび」と「しほり」すなわち、深い観照と閑寂味をたたえた余情を、幾星霜も変わらぬ富士の姿に見たもの。

はるか遠くより望む、瀟洒でありながら悠然たる富士の姿に、詩心を託した。書は、右肩下がりの丸い字に特徴がある。

### (15) 『奉額「奉納八幡宮」(嘉永三年)』

足助資料館蔵

94 cm×40 cm×2 cm (→翻刻は、11～12 頁参照)



(表面)

(裏面)

豊田の住人長谷川李墻と、岩村(岐阜県恵那市)の住人山内鳥川が、催主となって足助八幡宮に奉納した俳額。両者は足助本町の白木屋の奉公人であった。両者の呼びかけによる投句を塞馬が選定し、嘉永3(1850)年3月に奉納したものである。

### (16) 『三州八郡地理之図』



江戸時代の三河国の絵図。

110cm×113cm

三州とは三河国のこと。八郡は、宝飯郡、額田郡、加茂郡、渥美郡、幡豆郡、設楽郡、八名郡、碧海郡である。

五仲庵有節からほんばく菴麦に宛てた手紙

(『枇杷園句集』に挟み込まれていたもの)

時下弥御安逸奉賀候

然者小集出板則入

御覽候猶御作御もら

し奉希候先者右申

上度草略頓首

十月 五仲庵

菴麦君

足下

低う出て日もかけ

らふやしも燈

たつまては千鳥と

知らす昼の雨

水仙やひとりに

余る夜の薫り

御諫可被下候

(翻刻は堀川貴司慶応大学教授(文字文化財研究所客員共同研究員)による)

五仲庵有節ゆうせつ(一八〇五―一八七二)は、幕末から明治初期に近畿地方で活躍した有力俳人。菴麦は伊勢の俳人。伊勢俳壇は近畿俳壇の影響が強かったようである。本学図書館は五仲庵編纂の『芳新集』も貴重書として所蔵するが、『芳新集』にも菴麦宛の五仲庵の手紙が挟み込まれており、編書を介しての両者のやりとりがわかる。この手紙も五仲庵が菴麦に句集を贈った時のもの。菴麦が『枇杷園句集』に葉代わりにはさんだのであろう。

有節自撰『五仲庵有節句集』冬の部に、推敲の後と見られる次の三句がある。

低う出て日も陽炎ふや霜の原

立ぬ間八千とりと知らす昼の雨

茶亭閑座

水仙やひとりにをしき夜の薫り

奉額(表面)翻刻

催主

奉納八幡宮御広前  
春季発句点合一軸

李墻  
鳥川

大寺や苗代小田も垣のうち	桐里
鍛冶の火の草に停りて春月	李墻
からかさの下潜りけり雨の蝶	茶来
雪解や軒に並へし白木取	鳥川
若くさや古き野寺の駒つなき	雨石
鴈ゆくや一雨つゝのあたゝかみ	李墻
なへしろやむらなしにへる水の音	静雨
居酒屋の前て舟こす雪解哉	陸舟
かすむ日やわりあふてする畑仕事	李墻
火焚家の壁まてつたふ雪の家	鳥川

○

来るほとは声もそろはす帰る鴈	月枝
汐風のあらし海辺も□□□□	□霧
軒水の片側落る雪解かな	□鶯□
若□や傘ほしてあ□□□たけ	□□□

(以下六句不明)

□川	蟻村
水月	樵泉
鳥川	鳥川
桐里	桐里

春雨や鶏かゝへ行  
軒つたひ  
評者一庵  
嘉永三年庚戌春三月

奉額(裏面)翻刻

当国足助本町

白木屋宗七郎

店之者

施主

参陽挙母住人

長谷川久寿家智房

李 壻

濃州岩村住人

山内甚八郎家光

鳥 川

千穂楽萬々歳

(翻刻は深津三郎『板倉塞馬全集』による)